

## ヴェルレーヌの同時代批判：聖ブノワ・ラブル崇拝 をめぐって

岡, 由美子

<https://doi.org/10.15017/9974>

---

出版情報：Stella. 16, pp.17-30, 1997-07-01. Société de Langue et Littérature Françaises de  
l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



# ヴェルレーヌの同時代批判

—— 聖ブノワ・ラブル崇拝をめぐって ——

岡 由美子

1874年モンス監獄で回心をとげたヴェルレーヌは、翌年1月、敬虔なキリスト教徒となって出獄する。それに呼応して同時期から彼がつよい関心をしめすようになるのが、18世紀の放浪巡礼托鉢者、聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブルである<sup>1)</sup>。

まずラブルについて簡単に説明しておこう。1748年、アルトワ地方の中心地アラス周辺の一村アメットに生まれたブノワ＝ジョゼフ・ラブルは、「放浪者として福音書の教えそのままの生をおくる」という特異な召命にしたがい、22歳のときローマにむけて巡礼の旅にでる。以後6年間、施し物だけで生きながらヨーロッパの主な聖地のすべてを徒歩で巡ったが、虱がたかるほど不潔な身なりに書物のほかは何ももたず、夜は地面に眠ったという。人々の蔑みの的となった、肉体にたいするこの無頓着さこそ彼の苦行のひとつであり、彼が「ローマの放浪托鉢者」と呼ばれたゆえんである。ラブルは1783年に没するが、その後まもなく彼を聖人と認める声が民衆のあいだに高まり、1861年に列福、73年からは列聖への手続きがすすむことになる。そして彼がカトリック教会によって正式に列聖されたのは1881年12月8日のことである<sup>2)</sup>。

さて、1875年の夏アラスの母のもとで休暇を過ごしたヴェルレーヌは、友人のエルネスト・ドラエー、在郷の知人イレネ・ドクロワと散策に出かけたさい、アメットに立ちよって聖ブノワ・ラブルを祭った聖堂を訪れている<sup>3)</sup>。また1877年9月には、ジェルマン・ヌーヴォーとともに再び同地に巡礼し聖人の生家を訪ねている<sup>4)</sup>。このような聖人への崇拝は当然のことながら詩人の創作活動に反映されることになった。ヴェルレーヌは、ラブル列聖のさいに「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル——列聖の日」と題する詩編を着想したにとどまらず、複数の作品においてくりかえし聖人に言及しているのである<sup>5)</sup>。本稿で

は、そのなかから主として散文『古い町——失われたある書物の断片』をとりあげ、ブノワ・ラブル崇拝をとおしてあきらかになるヴェルレーヌの「同時代批判」について述べてみたい。

\*

はじめに『古い町——失われたある書物の断片』（以下『古い町』と略）の創作時期について述べておこう。『古い町』は、1889年11月9日「芸術と批評」誌に掲載された。しかしながら作品の執筆じたいはこの発表時期とは一致しないという説が有力である。当時ヴェルレーヌととりわけ親交の深かったエルネスト・ドラエーによれば、『古い町』は1875年から76年頃に着手された政治的攻撃文書『あるフランス人によるフランス旅行』（以下『フランス旅行』と略）の一章をなすはずであったという<sup>6)</sup>。さらにプレイアッド版『散文作品集』の註釈者ジャック・ボレルは、『古い町』の「わたしはアラスに住んではいないが、度々滞在している」という一節にもとづいて、執筆時期はヴェルレーヌがアラス在住の母のもとでひんぱんに休暇をすごしていた1875年から1880年の期間と推定しているのである<sup>7)</sup>。したがって『古い町』は遅くとも1880年までには執筆されていたと考えてさしつかえあるまい。

『古い町』では、教会を中心とするアラスの大建造物の形態と、そこにまつわる歴史や物語が紹介されている。しかしヴェルレーヌは、聖ブノワ・ラブルの記念像を安置するサン＝ヴァースト大修道院の記述にだけは、みずからの経験談としてひとつのエピソードを挿入しているのである。そのエピソードとはつぎのようなものだ——。アラス滞在中サン＝ヴァーストの教会堂にたびたび赴いている詩人は、ある日セールスマンらしき若い男が聖水で身を清めずに入ってくるのを目にする。男が時間つぶしに立ち寄ったのはあきらかだ。彼は祈りをささげる人々への配慮もなく会堂内を歩きまわり、洗礼堂や祭壇画そして聖ブノワ・ラブルの記念像などをながめている。そのあいだつねに物憂げだった男の眼が輝くのは、祈り終えた若い女性の後をひそかに追いかけるときだけである。

ヴェルレーヌは、教会堂で冒瀆的な態度をとるこのセールスマンを「現代フランス人の完璧な手本」<sup>8)</sup>とみなしている。そして、彼によってブノワ・ラブル

ルの列聖が嘲笑される場面を想定しているのである——

わたし〔ヴェルレーヌ〕はこの不幸な男のことで頭をいっぱいにして教会を出た。〔…〕たとえば帽子の話といった何かほかの話題と同じように、彼が聖職者の盲目的崇拜やラブルについて宗教問題を論じはじめるのが聞こえてくるようだ。「死にたえた教会が虚栄と贅沢さにまみれていながら、近ごろ虱だらけのうさん臭いラブルを称揚している、なんという欺瞞と矛盾だろう！」と。<sup>9)</sup>

じじつ、ブノワ・ラブルの列聖手続きが「秩序、労働そして品位の観念をかくも崇拜する」<sup>10)</sup> 19世紀後半のフランス社会に引きおこした反発はけっして小さくなかった。当時の有名なカフェ・コンセール「黒猫」においてさえも、マック＝ナブという歌手が「列福されたラブル」と題された歌をうたって大成をおさめたという事実がその話題性の大きさをものごとがたっているよう<sup>11)</sup>。なかでもとりわけ激しかったのが共和主義者や反聖職者主義者ら左派の側からのラブル列聖にたいする糾弾であった。彼らにとって、垢にまみれ虱のたかった人物を聖人あつかいすることこそカトリック教会の蒙昧主義の明確なあらわれにほかならないのであり、教会を非難する絶好の材料だったのだ<sup>12)</sup>。つまり、ここでセールスマンが述べているラブル列聖への批判は、第三共和制下の世相を反映するものであったといえるだろう。ヴェルレーヌがこのセールスマンを、信仰をもたずカトリック教会を軽んじる同時代人の典型として登場させているのはあきらかである。

一方、この時期ヴェルレーヌは、ジョゼフ・ド・メーストルにならい教皇権至上主義に賛同していた。なるほど彼がすでに初期詩編「死者たち」(1861年)において、トランスノナン虐殺にたおれた若き共和主義者たちにたいする共感と羨望を明確にしていたのは事実である。しかしながら回心後に執筆された『フランス旅行』では、一転して王政にノスタルジーをいだき、フランス革命以来「共和主義的思考と手を組んで悪化する恐るべき不信心」<sup>13)</sup>に警鐘を鳴らしているのである。そして聖ブノワ・ラブルは、ヴェルレーヌによってこの不信心な同時代人の対極に位置づけられている。聖人にたいする感動は、ともすれば同時代人の冒瀆的な行為によって引き起こされた絶望感をいやしてあまりあるほどだ——

彼は——気の毒に！——何も理解しないまま聖ブノワ・ラブルの記念像を凝視している（聖ブノワ・ラブルこそ18世紀フランス唯一の宗教的栄光だ！ それにしてもなんと大きな栄光だろう！ 貧困を愛し不便さを熱愛する、このような聖人や兵士たちを有する国に永久に絶望する必要があるだろうか！ そしてまた、現代人のおぼつかない脳にとってはなんとというつまづきの石だろう！）。<sup>14)</sup>

ヴェルレーヌはラブルを「18世紀フランスにおける唯一の宗教的栄光」とみなしている。その宗教的栄光とは、彼の苦行、すなわち「貧困」と「不便さ」にたいする熱愛に由来するのである。だが聖人の無私・無欲な献身の価値は、同時代人の「おぼつかない頭脳」では理解されえない。ヴェルレーヌがラブルと、彼を列聖したカトリック教会を称賛するのは、19世紀という同時代がこの「安らぎなき苦行者」の献身的な信仰とあまりにかけはなれているからにほかならない。つまり「憎悪、高慢、物欲、あらゆる罪に満ちた」信仰心の希薄な時代であるからなのだ——

教会はなんと善良なことか、憎悪、  
高慢、物欲、あらゆる罪に満ちたこの時代に、  
知られざる者のなかの知られざる者、人間の無知にこのうえなく優しい人を  
今日、称揚するのだから

贖罪のための苦行に血を吐くように苦しみ、恍惚で青ざめるこの安らぎなき苦行者を  
信仰はいま人々や聖人たちのもとにみちびく  
彼は何ひとつ執着するものをもたず  
貧困をみずからの妻とし、女王とした [...] <sup>15)</sup>

「倒錯した世紀」<sup>16)</sup>、「恐るべき無知と憎悪の時代」<sup>17)</sup>などと表現を変えながら、この時期のヴェルレーヌは不信仰がはびこる同時代にたいする批判をくりかえし表明しているのである。

ところで、『遺稿集』（1903年刊）に採録されている『古い町』の異稿によると、セールスマンがラブル列聖を批判する場面には後続の一節があった。この一節が1889年の「芸術と批評」誌掲載時に削除されたのは、実際のラブルの列聖から時間的にあまりに隔たってしまったため文中の「やつは、れっ・せ・い・されようとしている On va le ca-no-ni-ser」という近接未来をもち

いた表現がもはや不適當になったせいであろうか。いずれにせよこの一節によって、ヴェルレーヌの同時代評価を文明批判の観点からとらえることが可能になろう——

やっは、れっ・せ・い・されようとしていますよね。あはっは！ まったく、あの連中は気が狂っているんですかね？ 近代精神にたいするなんてばかげた挑戦だろう！<sup>18)</sup>

セールスマンはラブルの列聖を「近代精神にたいするばかげた挑戦」であり「狂気じみた」行為だと嘲笑している。ここで今いちど喚起したいのは、聖ブノワ・ラブルの「貧困」や「不便さ」にたいする熱愛、それゆえヴェルレーヌが聖人の栄光をたたえていた点である。いいかえれば、彼がラブルを崇拝するのは、聖人の体現する「貧困」「不便さ」、くわうるに「不潔さ」といった、産業革命後のフランス・ブルジョワ社会の信奉する「近代精神」とはまったく相いれない要素ゆえなのである。ヴェルレーヌのラブル称揚をとおして見えてくるものは近代精神にたいする一種の反逆なのだ。

ところで、ヴェルレーヌの「反近代精神」とでも呼ぶべきものは——ラブルに言及した箇所のみならず——『古い町』において象徴的に表現されている。というのも、「絵になるもの、斬新なものを好む当世にあって、芸術家にも、物見だかい人々にも、ほとんどその名を知られない辺鄙な一地方都市」<sup>19)</sup>と形容されるアラスは、たえず「ねたみ深く狭量な民主主義の首都」<sup>20)</sup>パリの対極として肯定的にとらえられているからだ。「豊かさ」や「便利さ」「進歩」「科学」といった文明の産物を象徴する首都パリを、伝統をまもる「古い町」アラスに対照させる構成そのものがヴェルレーヌの「反近代精神」を反映しているといえよう。

さらに付言すれば、同様の精神は詩人の文学的視点についても指摘することができる。「現代の小説家と宗教」と題された『フランス旅行』の第7章において、ヴェルレーヌはフローベールやゾラ、ゴンクール兄弟ら「自然主義作家」を、唯一「宗教」という判断基準にもとづいて批判している<sup>21)</sup>。また彼がキリスト教詩集『叡知』（1880年）を出版したのは、自然主義文学の全盛期であった事実も忘れてはなるまい。すなわち、彼は科学的方法を積極的に文学にとりいれ、魂よりも肉体を表現することに関心をむける当時の文壇の潮流に完

全に逆行していたのである。

さきほど指摘したヴェルレーヌの「近代精神にたいする反逆」について、もう少し考察をすすめてみよう。というのも、アラスとパリの対比がみられるのはなにも『古い町』だけではないからである。『叙知』第3部所収の詩編XX<sup>22)</sup>においても同様の視点が導入されているのだ。ヴァン・ブヴェールによれば詩編の自筆初稿には「1877年、アラス」と記されていた<sup>23)</sup>。この事実から友人のパリっ子にアラスの町を案内するという詩の内容は、1877年のジェルマン・ヌーヴォーのアラス来訪に題材をとったものとみなすことができよう。詩人はパリしか知らない友人を、アラスが一望できる丘に連れていく。そして誇らしげにこの町の美しい自然と建造物を見せるのである――

パリっ子さん、際限なくおどろいている友よ、  
太陽が生まれた丘に登りましょう […]  
巨大な大聖堂と無限にのびる塔、  
青葉の下の瓦屋根、仰々しくやはり巨大な城壁の無意味な切り石、  
あちらの鐘楼、こちらの塔、そのほかのもの、すべてが  
「わたしたちのところ」の背後から射すどぎつい金色の光を  
西の雲が反射した、その青白い金色に映えている  
真綿の上のこれらの重い宝石、ね、そうでしょう、旅こそその宝石箱にふさわしい、  
これこそちょっとした風景画といえるでしょう […]<sup>24)</sup>

地理的に判断して「わたしたちのところ chez nous」とは、アラスからさほど遠くないファンプー村をさすとジャック・ロビッシュは指摘している<sup>25)</sup>。ファンプー村はヴェルレーヌの母方の故郷であり、彼が幼い頃からたびたび休暇をすごした場所である。「わたしたちのところ」という表現が強調されているのは、個人の家でなく村をさすというほどの意味かもしれないが、文脈から彼の同地への強い帰属感のあらわれを感じずにはおれない。そして『古い町』と同様に、伝統をまもるアラスの町の素朴な善良さは、「近代精神」を具現するパリを引き合いにだすことによっていっそう強調されているのである――

[...] ここではすべてが穏やかに生きて死ぬ、ひしめきあうものは何ひとつない、  
[...] つまり友よ、「わたしたちの壁の内側」にパリのものは  
かつての流行とあなたたちがまだ青いうちに食べてしまうかの名高い進歩の  
熟した果実しかないのだ。

〔…〕結局のところ、地方は良いと白状なさい。  
 そして老いた怪物の「壮麗さ」や弱々しい脈、あの匂いが  
 少しもなつかしくならぬと！<sup>26)</sup>

パリでは「青いうちに」享受されてしまう「かの名高い進歩」もアラスにとどくころには「熟した果実」になっている。「過去の流行」とはもはや流行ではありえない。アラスにはパリの喧騒も悪徳もなく、善良な人々が伝統をまもりつつ穏やかな生をおくっているのである。

ところでヴェルレーヌは、7歳のとき一家で上京して以来、ランボーとイギリスへ旅立つまでの約20年間パリに住みつづけていた。休暇のたびに両親の故郷アルデンヌ地方やアルトワ地方に滞在していたとはいえ、青春期の大半を首都でおくったことになる。そして彼は早い時期からみずからの「弱さ」を自覚していた。断ち切ることができないパリの誘惑こそ、飲酒をはじめとする悪習慣の主な原因であることを認識していたと思われる。というのも、一家と交流の深かったドゥローニュ神父の書簡によれば、1863年ヴェルレーヌは神父を訪ねたさい、パリにたいする恐怖をうちあけているからである。なお、それにたいして神父は、意志の弱い彼には大都市パリは不向きだと感想を残している<sup>27)</sup>。さらに、ランボーの出現が引きがねとなって妻マチルドとの家庭が崩壊したのもやはりパリであった。ヴェルレーヌにとってパリはいわば不幸な過去そのものなのだ。ランボーを狙撃し、獄中生活のさなかで回心を遂げた彼は、おそらく宗教的な次元においてだけでなく、新しき人間に生まれかわろうとしていたのである。じじつ、この詩と同時期に執筆されたジェルマン・ヌーヴォーのヴェルレーヌ宛書簡からは、友の再三の誘いにもかかわらずパリにもどることを拒否するヴェルレーヌの堅固な意志をはっきりと読みとることができる<sup>28)</sup>。

詩編XXにおいて詩人は首都を「老いた怪物」にたとえている。「弱々しい脈」、「あの匂い」といった一連の表現は、瀕死の病人パリを連想させずにはおかない。それにたいしてアラスでは生命が脈々と生きつづけている。伝統が何代にもわたって変わらず受け継がれているのだから。「われわれの城壁の内側」とはもちろんアラスの町そのものを意味する<sup>29)</sup>。だが、それにおとらず注目すべきは、「城壁の内側」に帰属することによってヴェルレーヌがパリでのおぞ



ましい過去と訣別しようとしている点であろう。彼が「パリっ子さん」と呼びかけ「田舎は良いと白状なさい」と促している相手こそ、訣別すべきかつての自分自身にほかならないのである。

ところで、ヴェルレーヌがかつて妻マチルドやその両親とともに住んでいたのはモンマルトルのニコレ街であった――

――さて、下りましょう。あなたの足をそれほど酷使していないにしても  
モンマルトルの眺めしか見たことのないあなたの眼を休ませるためだけに。<sup>30)</sup>

ロビッシュェによれば、モンマルトルの丘には義父母や妻との不愉快な思い出が結びついている<sup>31)</sup>。ランボーがパリに現われて以来ヴェルレーヌと彼らとの関係は悪化し、少なからぬ軋轢が生じた。それを考慮すれば、たしかにモンマルトルの記憶は「訣別すべき過去」に数えうるかもしれない。しかしながら実際には、妻マチルド、そして息子ジョルジュこそがヴェルレーヌのもっとも「執着した」過去だったのである。この時期、彼はマチルドとの復縁に望みを持ちつづけており、以後も晩年にいたるまで彼女にたいする愛と憎悪を表現するのをやめない。またこの詩編 XX を執筆するわずか数カ月前には、ランボーとの出奔以来会っていなかったジョルジュに再会しているのだ。自筆稿に「1877年、パリ」と付された『叢知』第3部詩編 XVI をみてみよう。詩編 XX と同様に、悪臭と喧騒にみちた「悪徳の巣」パリが表現されている。しかし、ここでは「近代精神」の象徴である首都への糾弾も嘲笑もみあたらない――

[…] さまざまな匂い。空虚な音。心がさまようところどこでも  
つねに眼を眩ませる砂ぼこりがまいあがる、  
つねに罪あるものがうごめく  
心が吐き気をもよおすこの孤独のなかで！

そこから立ちのぼる生気のない倦怠のなかに  
多少とも、賢者は隠遁地をもうけて欲しいものだ、  
彼の魂を二分するものがこの虚無のなかで泣いているからこそ  
いっそう厳しく、また聖化された隠遁地を！<sup>32)</sup>

パリに虚無感があふれているのは、そこに暮らす妻子と離別してしまったヴェ

ルレーヌ自身の孤独と密接にむすびついているがゆえなのである。つまり詩編XXでもちいられている「モンマルトル」という地名には、むしろヴェルレーヌの忘却しえない過去への執着をよみとることができるのではないか。かつての自分自身との訣別を表現しようとしたこの作品にも、内面の葛藤は「開いた傷口」<sup>33)</sup>のように顔をのぞかせているのである。

\*

以上のように本稿では、聖ブノワ・ラブル崇拜をとおしてヴェルレーヌの「同時代批判」に注目した。ところで、ここで論じた「時代にたいする反逆」は、第1詩集『土星びとの歌』のプロローグで「行動と夢想とが分離してしまった」同時代を糾弾する初期のヴェルレーヌを想起させずにはおかない。興味ぶかいのは、この初期の「反逆」が、詩人としての存在論と密接にむすびついていた点だ。つまり自己を「呪われた詩人」と認識することである。初期詩編「ドン・キホーテに」「タッソー」,「奇怪な人々」(『土星びとの歌』所収)などにおいて、すでにヴェルレーヌは「冒険に破滅した狂人」、社会の異端者としての詩人の受ける苦難と幸福・栄光を大胆に表現していたのである。聖ブノワ・ラブル崇拜の陰画として浮かびあがる「反逆」も初期のその延長線上に捉えることができるのではないだろうか。ランボーのふたりの「弟子」ヴェルレーヌとヌーヴォーがともに崇拝した聖人は、じつはあらゆる「追放者」「放浪者」の守護聖人であった。カトリック教会はブノワ・ラブルを列福・列聖したのちも彼の聖性を全面的に肯定してはいなかったのである。彼はまさに「カトリックの序列からいくぶんはみだした聖人、あまりに大衆的で盲目的な信仰をひきつけるがゆえになにやら異端の匂いをかぎつけずにはおれない放浪の聖人」<sup>34)</sup>なのである。そしてヴェルレーヌは1884年、自らを論じた「ポール・レリアン」をふくむ詩人論『呪われた詩人たち』を執筆、さらに1887年にはふたたび詩人の「不運 guignon」を「カプリーチョス」にうたう。時期的な対応関係から見ても、ブノワ・ラブル崇拜は、ヴェルレーヌが詩人たることを問い直すための一連の試みと無関係とはけっして思われないのである。

## 註

- 1) 聖ブノワ・ラブルの生誕地アメットのあるアルトワ地方は母方の故郷であり、ヴェルレーヌは若いころから休暇を過ごすため同地方のアラス、ファンプー、レクリューズなどにひんぱんに滞在していた。したがってかなり早い時期から彼がアルトワの生んだ聖人について聞きおよんでいたと考えてもふしぎはないが、聖ブノワ・ラブルにたいする関心が具体的に表明されるようになるのは、回心を遂げた1874年以後のことである。  
 なお、ヴェルレーヌ作品からの訳出・引用にはブレリアッド版 (Paul VERLAINE, *Œuvres poétiques complètes*. Texte établi et annoté par Y.-G. LE DANTEC. Édition revue, complétée et présentée par Jacques BOREL. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962; *Œuvres en prose complètes*. Texte établi, présenté et annoté par Jacques BOREL. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972) を使用する。以下、これらの版についてはそれぞれ *CEP*, *CEPR* の略号をもちいる。なお、邦文引用はすべて拙訳による。
- 2) これについては以下を参照されたい——『キリスト教人名辞典』, 日本基督教団出版局, 1986年, 1770頁; *New Catholic Encyclopedia*, Washington : The Catholic University of America, 1967, vol. VIII, p. 302; *The Oxford Dictionary of Saints*, New York : Oxford University Press, third edition, 1992, p. 286.
- 3) Voir Ernest DELAHAYE, *Verlaine*, Monaco : Sauret, coll. «Pages perdues et retrouvées», 1993, t. I, p. 202.
- 4) いうまでもなく詩人ジェルマン・ヌーヴォーは、ランボーがヴェルレーヌとの衝撃的な破局ののち約3ヵ月間にわたりロンドンで共同生活をおくった人物である。ヴェルレーヌとジェルマン・ヌーヴォーの交流は、モンズ監獄から出所 (1875年1月) した後かつての相棒を自分と同様に回心させようとシュツットガルトに赴いたヴェルレーヌが、ランボーから手わたされた『散文詩』(『イリュミネーション』) の自筆稿を彼の依頼でヌーヴォーに送ったことに端を発するのである。何度かの手紙のやりとりののち、2人は1875年5月頃ロンドンではじめて顔をあわせるのだが、そのさい回心したてのヴェルレーヌがヌーヴォーにたいしても信仰にもどるよう説いたであろうことは想像にかたくない。ヴェルレーヌとの出会いからまもなく、ヌーヴォーが叔父宛の書簡において神の恩寵の現れを体験したことを述べている事実は、彼の回心にヴェルレーヌがあたえた何らかの影響を示唆していると思われる (voir sa lettre à Alexandre Silvy, 26 mai 1875, in Germain NOUVEAU, *Œuvres complètes* [avec celles de Lautréamont]. Édition établie, présentée et annotée par Pierre-Olivier WALZER. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1970, p. 824)。ヴェルレーヌの招きによって実現した1877年のアメット巡礼は、ジェルマン・ヌーヴォーの信仰を方向づける決定的な

要因となった。というのも、これ以後ヌーヴォーは聖ブノワ・ラブルをみずからの守護聖人とし長篇詩「恭謙」において称賛するにとどまらず、後年には放浪・托鉢の聖人をまねて彼自身もじっさいに放浪と巡礼の生をおくることになるからである。

- 5) 1885年に執筆された「盗まれた聖遺物匣について」では、題名がしめすとおり、彼がふかい愛着をいだき大切にしていたブノワ・ラブルの聖遺物匣——中には聖人の膝の骨のかけらが入っていたという——を性的関係にあった少年のひとりに盗まれた憤りと、その少年が過ちを悔いて自分のように「素朴な信仰」をもつよう聖ブノワ・ラブルにささげられた祈りが表現される。さらに、1888年フィガロ紙に「清貧」の題で掲載され、のちに『幸福』（1891年刊）に収録された詩編「善き貧者よ、おまえの衣は軽い……」には聖人の名は明記されていないが、ルイ・モリスが指摘するように、ここでヴェルレーヌがラブルを想起していることはあきらかである。Voir Louis MORICE, *Verlaine. Le drame religieux*, Paris: Beauchesne et ses fils, 1946, pp. 445-446.
- 6) Voir Ernest DELAHAYE, *Documents relatifs à Paul Verlaine*, Paris: Maison du Livre, 1919, p. 48.
- 7) Voir la «Notice» de BOREL pour les *Œuvres polémiques, voyages*, in *ŒPR*, p. 1444. さらに同様の手がかりとして、ボレルは『遺稿集』（1903年刊）に収録された『古い町』の異稿に「いまやわれわれはこの章の目的をほぼ果たした」という表現がみられる点も指摘している。Voir les «Notes et Variantes» de BOREL pour la *Vieille Ville. Fragment d'un livre perdu*, in *ibid.*, p. 1463.
- 8) *Vieille Ville*, in *ibid.*, p. 1063.
- 9) *Idem*.
- 10) *Grand dictionnaire universel*, Paris: Administration du grand dictionnaire universel, 1866-1876, t. X, p. 16.
- 11) Voir les «Notes et Variantes» de WALZER pour la *Doctrine de l'Amour*, in NOUVEAU, *op. cit.*, p. 1229.
- 12) このような批判に反論して、すでに1868年、フランス・カトリックのなかでもとりわけ戦闘的なウルトラモンタニズムの指導者であり、カトリックの日報紙「世界」の編集者であったルイ・フランソワ・ヴィヨールは同誌上に、まず「ある清潔なヴォルテール主義者に反論して不潔な人々を擁護する——ブノワ・ラブルとヴォルテール」（1868年1月5日）を掲載する。その後も「ある虱だらけの司教」（同年1月9日）さらには「あたかもブノワ・ラブルからフランスを解放しなければならぬと思ひ込んでいるような」ヴィルモ氏なる人物にたいする攻撃文書（同年3月）などをつぎつぎと発表し、論争となっていた（voir *ibid.*, pp. 1229-1230）。また、1881年の列聖にさいして元老院議員コルボン氏はつぎのように述べて「聖人」を罵倒している——「そいつ〔ラブル〕は怠惰な男、不潔きわまりない男〔…〕狂神的な利己主義者だったので！ このうえないほど垢にまみれていたのです！ 彼

を聖列にくわえようとしている人々や枢機卿たちの誰一人として、われわれの誰一人として、彼をピンセットを介してでさえ触ろうとするものはいなかったでしょう！」(cité par Alain BUISINE, *Verlaine. Histoire d'un corps*, Paris: Tallandier, coll. «Figures de proue», 1995, p. 325)。さらに、詩集に収録するさい詩編「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル——列聖の日」に献辞を付すつもりであることをヴェルレーヌから手紙で知らされたエミール・ルブランは、この申し出がまったくうれしくなく、「かの虱だらけの聖人」を守護聖人にしたような気がして非常に迷惑だったとのちに回想しているのである (voir Émile LE BRUN, «Verlaine inédit», *Les Idées françaises*, janvier-février, 1924, cité par Jacques ROBICHEZ in VERLAINE, *Œuvres poétiques*, Paris: Garnier, 1986, p. 671)。

- 13) Voir *Voyage en France par un Français*, in *ŒPR*, pp. 995-999.
- 14) *Vieille Ville*, in *ŒPR*, pp. 1062-1063.
- 15) «Saint Benoît-Joseph Labre», *Amour*, in *ŒP*, p. 438. 「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル——列聖の日」は1884年1月13日「批評」誌上に発表され、のちに詩集『愛』に収録された。ところで、プレイアッド版の校訂者イヴ＝ジェラルド・ダンテックによれば、ジャック・ドゥーセ図書館に所蔵されている『愛』の自筆稿集(「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル——列聖の日」はもちろん、ほとんどすべての詩集収録詩編の自筆稿をふくむ)においては、詩編の題名は「聖ブノワ・ラブル」とされ、副題は付されていない。さらに、この自筆稿には「1887年12月8日」という日付があり、作品につづいて「批評」誌に掲載された同詩の切り抜きに誤植の訂正がなされ、さらにエミール・ルブランへの献辞が書きかわえられている (voir les «Notes et Variantes» de LE DANTEC pour *Amour*, in *ŒP*, p. 1189)。この献辞はしかし詩集では採用されなかった。ところで、「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル——列聖の日」の雑誌への発表がすでに1884年になされているからには、作品の着想・執筆がそれ以前であることはまちがいない。ではドゥーセ図書館所蔵の自筆稿に記された日付は何を意味するのだろうか。それが誤植でないことは、ジャック・ボレルが『愛』の解題で同詩集の生成にふれ、1887年に執筆された詩のなかに「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル」を分類していることからあきらかであろう (voir la «Notice» de BOREL pour *Amour*, in *ŒP*, p. 402)。また同詩の執筆時期について、ジョルジュ・ザイエッドとジャック・ロビッシュェはともに、ラブルの列聖の日(1881年12月8日)に作成されたとしている (voir les «Notes» pour la lettre à Ernest Delahaye, 9 août [18]81, in Paul VERLAINE, *Lettres inédites à divers correspondants*, publiées et annotées par Georges ZAYED, Genève: Droz, 1976, p. 93; et les «Notes» de ROBICHEZ pour *Amour*, in *Œuvres poétiques*, op. cit., p. 671)。われわれとしては「1887年12月8日」は、『愛』への収録にさいして雑誌の切り抜きをくわえた新たな自筆稿が作成された日付と解釈したい。自筆初稿が執筆された正確な時期は不明だが、少なくとも作品の着想は実際のラブル列聖の日「1881年12月8日」だったという前提のもとに

論じてさしつかえあるまい。なお、1881年にエルネスト・ドラエーがヴェルレーヌにあてた書簡において、ヌーヴォーがヴェルレーヌに送るべき「聖ラブル」の詩編（「恭謙」をさすと思われる）がしばしば話題になっている——「文学的悔恨にとらわれたヌーヴォーはすっかり変わり、彼の「聖ラブル」を手直した。だから君はまだその詩を受けとっていないのだ。しかし間もなく届くだろう」「ヌーヴォーに会うたび、ぼくは彼が君に送るはずになっている詩のことを話している。でも、彼はじつに怠惰なんだ！」(lettres de Delahaye à Verlaine, s.d. [1881] et 26 juin 1881, in NOUVEAU, *op. cit.*, pp. 856-857)。この事実も、ヴェルレーヌが1881年に「聖ブノワ＝ジョゼフ・ラブル」を着想・執筆したのではないかとの推測に重要な示唆をあたえる。

- 16) «Paraboles», *Amour*, in *CEP*, p. 439.
- 17) «À propos d'un «centenaire» de Calderon», *Amour*, in *CEP*, p. 437.
- 18) «Notes et Variantes» de BOREL pour la *Vieille Ville*, in *CEPR*, p. 1465.
- 19) *Vieille Ville*, in *CEPR*, p. 1049.
- 20) *Vieille Ville*, in *CEPR*, p. 1059.
- 21) *Voyage en France par un Français*, in *CEPR*, pp. 1023-1042.
- 22) *Sagesse*, III-«XX», in *CEP*, pp. 289-290. プレイアッド版のテキストは基本的には1889年刊の『叡知』第2版にもとづく。しかし初版に収録され第2版で削除された詩編「木馬」をそのまま採録しているため、じっさいの第2版よりも収録詩編の数が1編多い。したがって、ここで詩番号はXIXでなくXXとなっている点を付記しておく。
- 23) Voir les «Notes» de ROBICHEZ pour *Sagesse*, in *Œuvres poétiques*, *op. cit.*, p. 627.
- 24) *Sagesse*, III-«XX», in *CEP*, p. 289.
- 25) Voir les «Notes» de ROBICHEZ pour *Sagesse*, in *Œuvres poétiques*, *op. cit.*, p. 627.
- 26) VERLAINE, *Sagesse*, III-«XX», in *CEP*, *op. cit.*, p. 290.
- 27) Voir la lettre de l'abbé Xavier Délogne à Louise Granjean, septembre 1863, citée par L. LE FEBVE DE VIVY, *Les Verlaine*, Bruxelles: Miette, 1928, p. 51.
- 28) 「パリにもどらないというあなたの決意があいかわらず決定的であることを残念に思っています。[...] あなたがわたしに節度もち熱狂しすぎないように忠告してくれるのはもっともなことです」(lettre de Nouveau à Verlaine, Paris 4 janvier 1876, in NOUVEAU, *op. cit.*, p. 837)。ヌーヴォー自身もパリに恐怖感をいだいており、書簡のなかでヴェルレーヌの助言と戒めに感謝している。
- 29) ロビッシュェはこの表現に「変わらぬ伝統のなかに閉じこめる地方人の意志」をよみとる。Voir les «Notes» de ROBICHEZ pour *Sagesse*, in *Œuvres poétiques*, *op. cit.*, p. 628.

- 30) *Sagesse*, III-«XX», in *ŒP*, p. 290.
- 31) Voir les «Notes» de ROBICHEZ pour *Sagesse*, in *Œuvres poétiques*, op. cit., p. 628.
- 32) *Sagesse*, III-«XVI», in *ŒP*, p. 286. ケスラー版は、最終詩句「彼の魂を二分するものがこの虚無のなかで泣いているからこそ！」について、「わたしの妻と息子」という、詩人自身による注釈を付している（voir les «Notes» de ROBICHEZ pour *Sagesse*, in *Œuvres poétiques*, op. cit., p. 625）。
- 33) 「わたしは一人息子に再会した。わたしの心で最悪の傷がひらくように思えた」（*Sagesse*, I-«XVIII», in *ŒP*, p. 257）。
- 34) BUISINE, *op. cit.*, p. 325.